

学 年	教科等	主題(教材)名	日 時
第 1 学年	道徳科	だめなことはだめだよ (にんじんばたけで)	令和 7 年 10 月 27 日(月)

1 本時のねらい

うさぎがにんじんの食べかすを見付けたときの気持ちや、食べてはいけないと判断したときの気持ちを考えることをとおして、周りの状況に左右されることなく、よいことと悪いことを正しく判断することの大切さに気づき、よいと思うことを進んで行おうとする心情を育む。

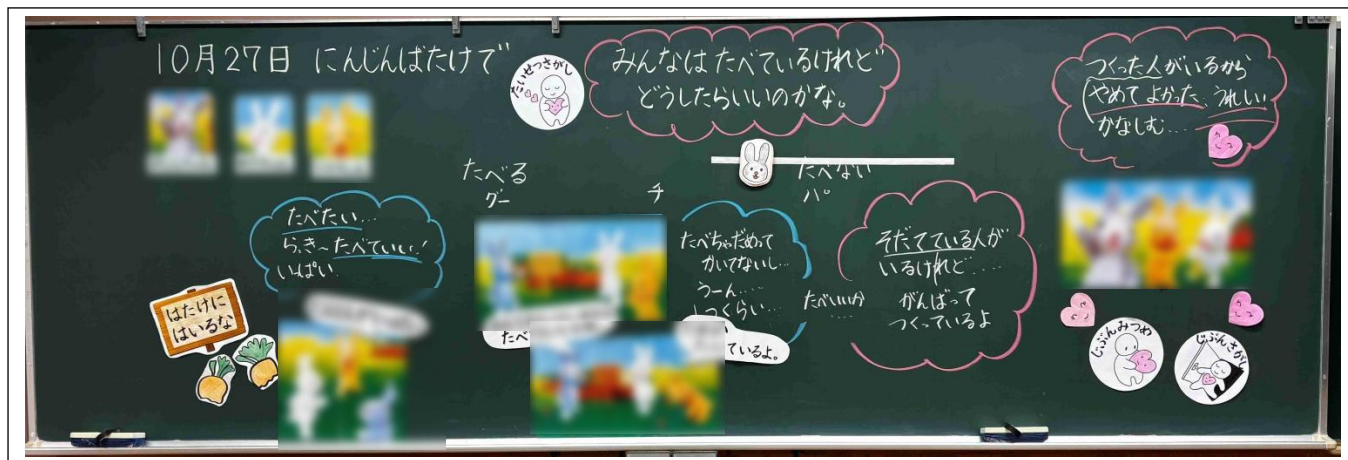
2 指導過程

学習活動及び学習内容（◇は発問）	「自律的に学ぶ」ための手立て
1 教材と同じ場面において、にんじんを食べるかについて、どのように判断するか考えを出し合う。 ◇ 目の前に大好きなにんじんがあったら、どうしますか。 ・ 食べたい。食べる。 ・ 勝手に食べてはいけない。等 ◇ 「はたけにはいるな」という立て札とにんじんの食べかすを見付けたらどうしますか。 ・ 食べない。 ・ 食べたいけど我慢する。 ・ みんな食べているけどな。等 ○ 学習テーマ みんな食べているけれど、どうすればよいのかな。 2 教材に含まれる道徳的問題について考える。 ○ にんじんを見付けた 3 匹の気持ちについて ◇ おいしそうなにんじんを見付けた 3 匹は、どんなことを思ったのかな？ ・ おいしそう。 ・ みんなで食べよう。 ・ 今すぐ食べたい。等 ○ にんじんの食べかすを見付けて顔を見合わせる 3 匹の気持ちについて ◇ 食べかすを見付けた 3 匹は、どんなことを話しているのかな？ ・ 1 つくらいいいかな。 ・ 畑に入るなど書いてあるよ。 ・ 育てている人がいるよ。 ・ よいことと悪いことを考えないと。 ・ だめなものはだめだよ。等 ○ おいかけてこの続きを始めた 3 匹の気持ちについて ◇ にんじんを食べなかった 3 匹が、よい笑顔なのはどうしてかな？ ・ 食べなくてよかった。 ・ 悪いことをしなくてよかった。 ・ 正しいことができて気持ちがよい。等 3 教材をとおして考えたことを基に、善悪の判断についての価値観を深める。 ○ うさぎさんへの手紙 ・ みんなが食べていても食べないでえらい。 ・ にんじんは食べられなくて残念だった。 ・ 食べたかったのに我慢できたね。等 4 学習全体をふりかえり、自己の生き方について考えを深める。 ○ 善悪の判断をすることのよさ	○ うさぎと同じ立場だったらどう判断するか問うことで、本時の学習を自分事として捉え、学習テーマにつなげることができるようにする。 ○ 図を用いて、食べるか食べないかの判断を視覚化することで、仲間の考えにばらつきがあることに気付かせ、正しい行動をしたい気持ちや迷う気持ちを共有することができるようにする。 ○ 教材を前半・後半と分けて提示することで、考える場面をより焦点化できるようにする。 ○ 場面絵を提示し「大好きなものが目の前にあったら誰でも食べたいという気持ちになるものかな。」と問うことで、正しい判断ができにくくなる状況を捉えることができるようにする。 ○ うさぎたちが顔を見合わせる場面を役割演技させることで、正しいことを理解していても、判断に悩む 3 匹の気持ちを捉えることができるようにする。 ○ 教師も役割演技に加わり「みんなも食べているよ。」「1 つくらいいいよ。」「誰も見ていないよ。」と語りかけることで、正しい判断につながる発言（育てている人がいる、だめなことはだめ）を引き出すことができるようにする。 ○ 3 匹の表情を動作化させた後に気持ちを問うことで、正しい判断ができた後のすがすがしい気持ちを理解することができるようにする。 ○ 「にんじんを食べなくて、残念だったはずでしょう。」と問い返すことで、食べたい気持ちはあっても、正しい判断ができた、すがすがしさや気持ちよさがあることに、気付かせるようにする。 ○ 3 匹のうさぎへの手紙を書かせることで、客観的な立場から改めてうさぎたちの行動について見つめ直し、善悪を正しく判断することの大切さを感じるができるようにする。 ○ 手紙を全体で共有することで、日常生活のなかでよりよい判断をすることのよさや大切さに気付かせ、これからの生活につないでいこうとする思いを温められるようにする。

3 本時の評価の視点

周りの状況に左右されることなく、よいことと悪いことを正しく判断することの大切さに気付き、よいと思うことを進んで行おうとしている。【道徳的価値の理解を自分自身とのかかわりのなかで深めているか】

4 板書



5 指導講評

宮崎県教育庁 義務教育課 大竹 進太郎 指導主事

○ 「子どもが、自ら「問い」をもつための手立て」について

今回の教材においては、1年生の教材にしては登場人物や立場が多いことを鑑みると、本時のような導入が有効であったと考えられる。実際、ゆとりのある時間配分で、終末にふりかえりの時間を十分に確保することができていたり、子どもが教材の内容をよく理解することができていたり多くのメリットが感じられた。

また、特に低学年の段階においては、日常生活と教材を結び付けることは難しく、物事を抽象化して比較できるようにするのは中学年頃からであるとも言われている。そのことから本時のような導入は効果的であると考えられる。

○ 「子どもが、物事を多面的・多角的に考え、納得解を生み出そうとするための手立て」について

今回の授業では、「子どもは、基本的にはよいことと悪いことを区別したり、判断したりする力はある程度身に付けている」という実態の基に授業を行ったが、役割演技では正しい判断をする子どもが少なかった。また、子どもの反応に対する想定ができておらず、効果的な問い返しを行うことができず、授業のねらいに迫ることができなかった。日頃から子どもの実態を把握すること、その実態把握を基に子どもの様々な意見を想定すること、そして、それに対応する教師の発問や問い返しを用意しておくことが必要である。

6 考察

【研究内容1：子どもが、自ら「問い」をもつための手立て】

今回の授業では、教材と同じ場面を提示し、うさぎと同じ立場だったらどうするかについて判断を問い、主題に対する興味や関心を高める導入を行った。こうした導入を行うことで、教材の大体の内容を理解して展開に入ることができた。また、どのようなことを中心にして考えを深めていけばよいかといった、見通しをもつことにはつながった。しかし、自ら「問い」をもつというところにまで高めていくには、子どもに問題意識をもたせる教材や資料提示の在り方について、手立てを工夫する必要がある。

【研究内容2：子どもが、物事を多面的・多角的に考え、納得解を生み出そうとするための手立て】

今回の授業では、役割演技をさせることで、正しいことについて理解はしていても、判断に悩む3匹の気持ちを考えることができるようにした。にんじんを「食べる」という立場からの役割演技が続き、価値理解につながる発言を十分引き出すことができなかった。にんじんを「食べてはいけない」という立場でのねらいにつながる発言（「だめなことはだめ」「育てている人が困る」等）が早い段階で引き出せるよう、意図的指名が必要であった。また、「食べる」という役割演技が続いた場合の教師の介入や問い返しについて考えておく必要がある。役割演技を行うにあたっては、低学年は特に、前に発言した子どもの意見や板書に大きく左右されやすいことから、子どもの発言の取り上げ方と子どもの考えを整理する板書の工夫が必要であると考えた。導入での子どもの判断と役割演技での子どもの反応は大きく異なっており、動作化や役割演技では、子どもの素直な気持ちや考えを引き出しやすいことも明らかとなった。今後も積極的に取り入れ、ねらいにつながる発言を引き出す板書と意図的指名や問い返しの在り方についても検討していきたい。